

数学 2 (問題)

1. 次の各問の に入る答のみを、所定の解答用紙に記入せよ。なお、必要であれば、付表の数値を用いよ。 (35点)

(1) 平均、分散の不明な2次元正規分布の母集団から抽出された大きさ n の標本の標本相関係数は0.6であった。このとき、母相関係数についての仮説「 $\rho = 0$ 」が有意水準0.05の両側検定で棄却されたとすれば、標本の大きさ n は 以上である。

(2) 母平均がともに μ 、母分散はそれぞれ、 σ_1^2 , σ_2^2 の2つの母集団をA, Bとする。A, Bからそれぞれ大きさ n_1 , n_2 の標本、 $(X_1, X_2, \dots, X_{n_1})$, $(Y_1, Y_2, \dots, Y_{n_2})$ を抽出し、標本平均 \bar{X} , \bar{Y} を用いて Z を、
$$Z = \frac{w_1 \bar{X} + w_2 \bar{Y}}{w_1 + w_2}$$
 と定義する。このとき、 $V(Z)$ を最小にする w_1 , w_2 の比は $w_1 : w_2 =$: である。

(3) ある金属線に関し、A社の製品4本とB社の製品6本について破断強度を測定したところ、次の結果を得た。

A社 : 41.7, 40.3, 35.8, 37.8 (kg)

B社 : 45.6, 40.7, 43.6, 40.5, 43.2, 39.6 (kg)

A社の製品とB社の製品の母集団は、分散の等しい正規分布に従うものとして、A, Bの2社の製品の破断強度の平均値の差の95%信頼区間は である (小数点以下第3位を四捨五入せよ)。

(4) 世帯数70,000の都市で、 n 世帯の世帯人数を調べて総人口を推定するのに、その変動係数 (平均 μ と標準偏差 σ の比 $\frac{\sigma}{\mu}$) を5%以下にするには、標本の大きさ n を 以上にすればよい。ただし、母集団の変動係数は1以下であることがわかっているものとする。

(5) 半径 μ の円の半径を測定し、その値を X とする。 X は正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従うものとし、半径を n 回測定したときの平均を \bar{X} とする。円の面積 $\pi \mu^2$ を推定するのに、推定量として $\pi \bar{X}^2$ を用いるとき、 $E(\pi \bar{X}^2) =$ である。

(付表) t分布表 : $t_{\phi}(\varepsilon)$ (自由度 ϕ 、上側確率 ε)

$\phi \setminus \varepsilon$	0.05	0.025	$\phi \setminus \varepsilon$	0.05	0.025
1	6.314	12.706	11	1.796	2.201
2	2.920	4.303	12	1.782	2.179
3	2.353	3.182	13	1.771	2.160
4	2.132	2.776	14	1.761	2.145
5	2.015	2.571	15	1.753	2.131
6	1.943	2.447	16	1.746	2.120
7	1.895	2.365	17	1.740	2.110
8	1.860	2.306	18	1.734	2.101
9	1.833	2.262	19	1.729	2.093
10	1.812	2.228	20	1.725	2.086

2. 指数分布 (確率密度関数 $f(x, \theta) = \frac{1}{\theta} e^{-x/\theta}$ ($0 \leq x < \infty$, $0 < \theta$)) を持つ母集団から大きさ1の標本 x を抽出し、帰無仮説 $H: \theta = \theta_0$ を対立仮説 $A: \theta < \theta_0$ に対して検定する ($\theta_0 > 0$)。

このとき、有意水準0.05に対する一様最強力 (一様最有力) 検定の棄却域 C を求めよ。

(15点)

3. (X_1, X_2, \dots, X_n) を母数 θ の母集団からの標本変量とし、 $\hat{\theta} = \hat{\theta}(X_1, X_2, \dots, X_n)$, $T = T(X_1, X_2, \dots, X_n)$ を、それぞれ、標本変量 (X_1, X_2, \dots, X_n) からつくられる母数 θ の不偏推定量および十分統計量とする。

(1) $\hat{\theta}^* = E(\hat{\theta} | T)$ は θ の不偏推定量であることを示せ。ただし、 $\hat{\theta}$ と T の結合確率分布および $\hat{\theta}$, T の周辺確率分布は連続型であるとする (以下の問についても同様)。

(2) $E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)(\hat{\theta}^* - \theta)) = 0$ であることを示せ。

(3) $V(\hat{\theta}^*) \leq V(\hat{\theta})$ となることを示せ。 (25点)

4. 平均 m のポアソン分布に従う母集団について、母平均 m の信頼区間を求めるため、以下の考察を行う。

(1) $e^a = 1 + a + \frac{a^2}{2!} + \dots + \frac{a^k}{k!} + \frac{1}{k!} \int_0^a e^x (a-x)^k dx$ を示せ。

(2) $f_{2(k+1)}(x)$ を自由度 $2(k+1)$ の χ^2 分布の確率密度関数としたとき、パラメーター λ のポアソン分布

$$p(j; \lambda) = \frac{\lambda^j}{j!} e^{-\lambda} \quad (j = 0, 1, 2, \dots)$$

$$\sum_{j=0}^k p(j; \lambda) = \int_{2\lambda}^{\infty} f_{2(k+1)}(x) dx, \quad \sum_{j=k+1}^{\infty} p(j; \lambda) = \int_0^{2\lambda} f_{2(k+1)}(x) dx$$

(3) (2) を利用して、母平均 m に対する信頼係数 α の信頼区間を求めよ。

(25点)

以 上

数学 2 解答

1.

(1) 仮説「 $\rho = 0$ 」が棄却されるのは、 $\frac{|t|}{\sqrt{1-r^2}}\sqrt{n-2} > t_{n-2}\left(\frac{\varepsilon}{2}\right)$ が満たされる場合である。

ここで、 $r=0.6$ を代入して、 n をいろいろ変えて不等式の成立を調べると、

$$n=9: 0.75 \times \sqrt{7} < 2.365$$

$$n=10: 0.75 \times \sqrt{8} < 2.306$$

$$n=11: 0.75 \times \sqrt{9} < 2.262$$

$$n=12: 0.75 \times \sqrt{10} > 2.228$$

よって、 n は 12 個以上必要である。

(2)

$$\begin{aligned} E(Z) &= E\left(\frac{w_1\bar{X} + w_2\bar{Y}}{w_1 + w_2}\right) = \frac{1}{w_1 + w_2} (w_1 E(\bar{X}) + w_2 E(\bar{Y})) \\ &= \frac{1}{w_1 + w_2} (w_1 \mu + w_2 \mu) = \mu \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V(Z) &= V\left(\frac{w_1\bar{X} + w_2\bar{Y}}{w_1 + w_2}\right) = \frac{1}{(w_1 + w_2)^2} (w_1^2 V(\bar{X}) + w_2^2 V(\bar{Y})) \\ &= \frac{1}{(w_1 + w_2)^2} \left(w_1 \frac{\sigma_1^2}{n_1} + w_2 \frac{\sigma_2^2}{n_2} \right) \\ &= \left(\frac{w_1}{w_1 + w_2}\right)^2 \frac{\sigma_1^2}{n_1} + \left(\frac{w_2}{w_1 + w_2}\right)^2 \frac{\sigma_2^2}{n_2} \end{aligned}$$

$V(Z)$ を最小にする w_1, w_2 を求めるために、 $v_1 = \frac{w_1}{w_1 + w_2}$ 、 $v_2 = \frac{w_2}{w_1 + w_2}$ とおけば、

$v_1 + v_2 = 1$ であり、

$$V(Z) = v_1^2 \frac{\sigma_1^2}{n_1} + v_2^2 \frac{\sigma_2^2}{n_2} = v_1^2 \frac{\sigma_1^2}{n_1} + (1-v_1)^2 \frac{\sigma_2^2}{n_2} = \left(\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}\right) v_1^2 - 2\frac{\sigma_2^2}{n_2} v_1 + \frac{\sigma_2^2}{n_2}$$

ここで、 $\frac{\partial V(Z)}{\partial v_1} = 2\left(\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}\right)v_1 - 2\frac{\sigma_2^2}{n_2}$ より、 $V(Z)$ は、 $v_1 = \frac{\frac{\sigma_2^2}{n_2}}{\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}}$ のとき最小に

なる。このとき、 $v_2 = \frac{\frac{\sigma_1^2}{n_1}}{\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}}$

よって、 $w_1 : w_2 = v_1 : v_2 = \boxed{\frac{\sigma_2^2}{n_2}} : \boxed{\frac{\sigma_1^2}{n_1}}$ または $\boxed{n_1\sigma_2^2} : \boxed{n_2\sigma_1^2}$

(3) A社製品について、

$$n_A = 4, \bar{x}_A = \frac{1}{4}(41.7 + 40.3 + 35.8 + 37.8) = 38.9,$$

$$3s_A^2 = (41.7 - 38.9)^2 + (40.3 - 38.9)^2 + (35.8 - 38.9)^2 + (37.8 - 38.9)^2 = 20.62$$

B社製品について、

$$n_B = 6, \bar{x}_B = \frac{1}{6}(45.6 + 40.7 + 43.6 + 40.5 + 43.2 + 39.6) = 42.2$$

$$\begin{aligned} 5s_B^2 &= (45.6 - 42.2)^2 + (40.7 - 42.2)^2 + (43.6 - 42.2)^2 + \\ &\quad (40.5 - 42.2)^2 + (43.2 - 42.2)^2 + (39.6 - 42.2)^2 \\ &= 26.42 \end{aligned}$$

であるから、

$$x_A - x_B = -3.3, s^2 = \frac{3s_A^2 + 5s_B^2}{n_A + n_B - 2} = \frac{20.62 + 26.42}{8} = 5.88, s = 2.425,$$

$$\sqrt{\frac{1}{n_A} + \frac{1}{n_B}} = \sqrt{\frac{1}{4} + \frac{1}{6}} = \sqrt{\frac{5}{12}} = 0.6455$$

自由度 $n_A + n_B - 2 = 4 + 6 - 2 = 8$ のとき、t 分布表より $t_8(0.025) = 2.306$ である。

正規母集団の平均値の差の区間推定は、

$$\left((\bar{x}_A - \bar{x}_B) - t_\alpha \left(\frac{\epsilon}{2} \right) s \sqrt{\frac{1}{n_A} + \frac{1}{n_B}}, (\bar{x}_A - \bar{x}_B) + t_\alpha \left(\frac{\epsilon}{2} \right) s \sqrt{\frac{1}{n_A} + \frac{1}{n_B}} \right) \text{ で与えられるか}$$

ら、これに各数値を代入して、求める信頼区間は、

$$(-3.3 - 2.306 \times 2.425 \times 0.6455, -3.3 + 2.306 \times 2.425 \times 0.6455) = \boxed{(-6.91, 0.31)}$$

(4) 母平均を μ 、母分散を σ^2 とすると、題意より、 $\frac{\sigma}{\mu} \leq 1$

総人口を τ 、総世帯数を N 、標本の大きさを n とし、総人口の推定量を T とすると、

$E(T) = \tau$ 、 $V(T) = N^2 \frac{N-n}{N-1} \cdot \frac{\sigma^2}{n}$ 、 $\mu = \frac{\tau}{N}$ であるから、 T の変動係数は、

$$\frac{\sqrt{V(T)}}{E(T)} = \frac{N \sqrt{\frac{N-n}{N-1}} \cdot \frac{\sigma}{\sqrt{n}}}{\tau} = \frac{\sigma}{\mu} \cdot \sqrt{\frac{N-n}{N-1}} \cdot \frac{1}{\sqrt{n}} \leq \sqrt{\frac{N-n}{N-1}} \cdot \frac{1}{\sqrt{n}}$$

したがって、 $\sqrt{\frac{N-n}{N-1}} \cdot \frac{1}{\sqrt{n}} \leq 0.05$

これを解いて、 $N=70,000$ を代入すれば、 $n \geq \frac{N}{0.05^2(N-1)+1} = 397.7\dots$

よって、標本の大きさは $\boxed{398}$ 以上とすればよい。

(5) $E(\bar{X}) = E\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right) = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E(X_i) = \frac{1}{n} \cdot n \cdot \mu = \mu$ より、

$$\begin{aligned} E(\pi \bar{X}^2) &= \pi E(\bar{X}^2) = \pi (E(\bar{X})^2 + V(\bar{X})) = \pi \left(\mu^2 + V\left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i\right) \right) = \pi \left(\mu^2 + \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n V(X_i) \right) \\ &= \pi \left(\mu^2 + \frac{1}{n^2} \sum_{i=1}^n \sigma^2 \right) = \pi \left(\mu^2 + \frac{1}{n^2} \cdot n \cdot \sigma^2 \right) = \boxed{\pi \left(\mu^2 + \frac{\sigma^2}{n} \right)} \end{aligned}$$

2.

$\theta_1 < \theta_0$ なる任意の θ_1 をとり、与えられた帰無仮説に対して対立仮説を

$A': \theta = \theta_1$ とした有意水準 0.05 の検定を考える。このとき、最強力検定法の棄却域

は、ネイマン・ピアソンの補題により、不等式 $\frac{f(x, \theta_1)}{f(x, \theta_0)} \geq k$ (k は正の定数) を満

たす x の集合 C_k で与えられる。

$$\frac{f(x, \theta_1)}{f(x, \theta_0)} \geq k \Rightarrow \frac{\frac{1}{\theta_1} \exp\left(-\frac{x}{\theta_1}\right)}{\frac{1}{\theta_0} \exp\left(-\frac{x}{\theta_0}\right)} \geq k \Rightarrow \frac{\theta_0}{\theta_1} \exp\left(-\left(\frac{1}{\theta_1} - \frac{1}{\theta_0}\right)x\right) \geq k \Rightarrow x \leq k' \quad \left(k' = -\frac{\log\left(\frac{\theta_1}{\theta_0} k\right)}{\frac{1}{\theta_1} - \frac{1}{\theta_0}} \right)$$

よって、 C_k は $\{x; 0 \leq x \leq k'\}$ の形の区間で与えられる。

さらに、有意水準 0.05 とするためには、 $\int_{W_k} f(x, \theta_0) = 0.05$ とすればよい。

$$\int_{W_k} f(x, \theta_0) = \int_0^{k'} \frac{1}{\theta_0} \exp\left(-\frac{x}{\theta_0}\right) dx = \left[-\exp\left(-\frac{x}{\theta_0}\right)\right]_0^{k'} = 1 - \exp\left(-\frac{k'}{\theta_0}\right) = 0.05$$

$$\therefore k' = -\theta_0 \log(0.95)$$

よって、 C_k は θ_1 には依存せず、すべての $\theta < \theta_0$ に対して、 C_k は同一である。

従って、求める棄却域 C は、 $C = \{x; 0 \leq x \leq -\theta_0 \log(0.95)\}$ である。

3.

$\hat{\theta}$ と T の結合確率密度関数を $f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta)$ 、 $\hat{\theta}$ と T の確率密度関数をそれぞれ、

$f_{\hat{\theta}}(x; \theta)$ 、 $f_T(t; \theta)$ とし、 $T=t$ が与えられたときの $\hat{\theta}$ の条件付確率密度関数を $f_{\hat{\theta}|T}(x, t)$

とすると、 $f_{\hat{\theta}}(x; \theta) = \int_{-\infty}^{\infty} f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta) dt$ 、 $f_{\hat{\theta}|T}(x, t) = \frac{f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta)}{f_T(t; \theta)}$ である。ところで、

T の十分性により、 $f_{\hat{\theta}|T}(x, t)$ は θ に関係しない。

(1)

$$\hat{\theta}^*(t) = E(\hat{\theta}|T) = \int_{-\infty}^{\infty} x f_{\hat{\theta}|T}(x, t) dx = \frac{1}{f_T(t; \theta)} \int_{-\infty}^{\infty} x f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta) dx \quad \text{であるから、}$$

$$\begin{aligned} E(\hat{\theta}^*) &= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \frac{1}{f_T(t; \theta)} \int_{-\infty}^{\infty} x f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta) dx \right\} f_T(t; \theta) dt = \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} x f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta) dx \right\} dt \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} x \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta) dt \right\} dx = \int_{-\infty}^{\infty} x f_{\hat{\theta}}(x; \theta) dx = \theta \end{aligned}$$

($\therefore \hat{\theta}^*$ は θ の不偏推定量)

よって、 $\hat{\theta}^*$ は θ の不偏推定量である。

(2)

$$\begin{aligned} E\left((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)(\hat{\theta}^* - \theta)\right) &= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} (x - \hat{\theta}^*(t)) (\hat{\theta}^*(t) - \theta) f_{\hat{\theta}, T}(x, t; \theta) dx \right\} dt \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \left\{ \int_{-\infty}^{\infty} (x - \hat{\theta}^*(t)) f_{\hat{\theta}|T}(x, t) dx \right\} (\hat{\theta}^*(t) - \theta) f_T(t; \theta) dt \end{aligned}$$

ここで、

$$\begin{aligned} \int_{-\infty}^{\infty} (x - \hat{\theta}^*(t)) f_{\hat{\theta}^*}(x, t) dx &= \int_{-\infty}^{\infty} x f_{\hat{\theta}^*}(x, t) dx - \hat{\theta}^*(t) \int_{-\infty}^{\infty} f_{\hat{\theta}^*}(x, t) dx \\ &= E(\hat{\theta}^* \Gamma) - \hat{\theta}^*(t) \cdot 1 = \hat{\theta}^*(t) - \hat{\theta}^*(t) = 0 \end{aligned}$$

であるから、 $E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)(\hat{\theta}^* - \theta)) = 0$

(3)

$$\begin{aligned} V(\hat{\theta}) &= E((\hat{\theta} - \theta)^2) = E\{(\hat{\theta} - \hat{\theta}^*) + (\hat{\theta}^* - \theta)\}^2 \\ &= E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)^2) + 2E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)(\hat{\theta}^* - \theta)) + E((\hat{\theta}^* - \theta)^2) \\ &= E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)^2) + 2E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)(\hat{\theta}^* - \theta)) + V(\hat{\theta}^*) \end{aligned}$$

ここで、 $E((\hat{\theta} - \hat{\theta}^*)^2) \geq 0$ と (2) の結果より、 $V(\hat{\theta}) \geq V(\hat{\theta}^*)$

4.

(1) $I_k = \frac{1}{k!} \int_0^a e^x (a-x)^k dx$ とする。部分積分により、

$$\begin{aligned} I_k &= \frac{1}{k!} \int_0^a e^x (a-x)^k dx = \frac{1}{k!} \left\{ \left[e^x (a-x)^k \right]_0^a - \int_0^a e^x k(a-x)^{k-1} (-1) dx \right\} \\ &= \frac{1}{k!} \left(-a^k + k \int_0^a e^x (a-x)^{k-1} dx \right) = -\frac{a^k}{k!} + \frac{1}{(k-1)!} \int_0^a e^x (a-x)^{k-1} dx = -\frac{a^k}{k!} + I_{k-1} \end{aligned}$$

これより、 $I_k = -\frac{a^k}{k!} - \frac{a^{k-1}}{(k-1)!} - \dots - \frac{a^2}{2!} - \frac{a^1}{1!} + I_0$ となる。

ここで、 $I_0 = \int_0^a e^x dx = e^a - 1$ であるから、

$$I_k = \frac{1}{k!} \int_0^a e^x (a-x)^k dx = -\frac{a^k}{k!} - \frac{a^{k-1}}{(k-1)!} - \dots - \frac{a^2}{2!} - \frac{a^1}{1!} + e^a - 1$$

よって、 $e^a = 1 + a + \frac{a^2}{2!} + \dots + \frac{a^k}{k!} + \frac{1}{k!} \int_0^a e^x (a-x)^k dx$

(2) (1) の結果を用いて、

$$\begin{aligned} \sum_{j=0}^k p(j; \lambda) &= e^{-\lambda} \left(1 + \lambda + \frac{\lambda^2}{2!} + \dots + \frac{\lambda^k}{k!} \right) = e^{-\lambda} \left\{ e^{\lambda} - \frac{1}{k!} \int_0^{\lambda} e^x (\lambda-x)^k dx \right\} \\ &= 1 - \frac{1}{k!} \int_0^{\lambda} e^{-(\lambda-x)} (\lambda-x)^k dx \end{aligned}$$

$$u = 2(\lambda - x) \text{ とすれば、 } \sum_{j=0}^k p(j; \lambda) = 1 - \frac{1}{k!} \int_{2\lambda}^0 e^{-\frac{u}{2}} \left(\frac{u}{2}\right)^k \left(-\frac{1}{2}\right) du$$

ここで、 $k! = \Gamma(k+1) = \Gamma\left(\frac{2(k+1)}{2}\right)$ より、

$$\sum_{j=0}^k p(j; \lambda) = 1 - \int_0^{2\lambda} \frac{1}{2\Gamma\left(\frac{2(k+1)}{2}\right)} e^{-\frac{u}{2}} \left(\frac{u}{2}\right)^{\frac{2(k+1)}{2}-1} du \quad \text{となる。}$$

自由度 $2(k+1)$ の χ^2 分布の確率密度関数は、

$$f_{2(k+1)}(x) = \frac{1}{2\Gamma\left(\frac{2(k+1)}{2}\right)} e^{-\frac{x}{2}} \left(\frac{x}{2}\right)^{\frac{2(k+1)}{2}-1}$$

であるから、 $\sum_{j=0}^k p(j; \lambda) = 1 - \int_0^{2\lambda} f_{2(k+1)}(x) dx = \int_{2\lambda}^{\infty} f_{2(k+1)}(x) dx$ である。

また、 $\sum_{j=k+1}^{\infty} p(j; \lambda) = 1 - \sum_{j=0}^k p(j; \lambda) = 1 - \int_{2\lambda}^{\infty} f_{2(k+1)}(x) dx = \int_0^{2\lambda} f_{2(k+1)}(x) dx$ となる。

(3) 母集団からの大きさ n の標本を (X_1, X_2, \dots, X_n) とすれば、

$T = X_1 + X_2 + \dots + X_n$ は平均 nm のポアソン分布に従う。

信頼係数 α に対して、 $\varepsilon = \frac{1-\alpha}{2}$ とし、それぞれ、

$$\sum_{j=0}^{k_1} p(j; nm) \leq \varepsilon, \quad \sum_{j=k_2}^{\infty} p(j; nm) \leq \varepsilon \quad \left(p(j; m) = e^{-m} \frac{m^j}{j!} \right)$$

を満たす最大の $k_1 = k_1(m)$ と最小の $k_2 = k_2(m)$ を求めれば、

$$P(k_1(m) < T < k_2(m)) \geq 1 - 2\varepsilon = \alpha$$

T の実現値を t とするとき、 $k_1(m), k_2(m)$ の定義と (2) の結果より、

$$k_1(m) < t < k_2(m)$$

$$\Leftrightarrow \varepsilon < \sum_{j=0}^t p(j; nm) = \int_{2nm}^{\infty} f_{2(t+1)}(x) dx, \quad \varepsilon < \sum_{j=t}^{\infty} p(j; nm) = \int_0^{2nm} f_{2t}(x) dx$$

である。

自由度 $2(t+1)$ の χ^2 分布の上側 ε 点を $\chi_{\varepsilon}^2 = \chi_{2(t+1)}^2(\varepsilon)$ とすれば、

$$\int_{\chi_{\varepsilon}^2}^{\infty} f_{2(t+1)}(x) dx = \varepsilon \text{ であるから、 } k_1(m) < t \Leftrightarrow 2nm \leq \chi_{\varepsilon}^2 \Leftrightarrow m \leq \frac{\chi_{\varepsilon}^2}{2n}$$

同様に、自由度 $2t$ の χ^2 分布の上側 $(1-\varepsilon)$ 点を $\chi_{\varepsilon}'^2 = \chi_{2t}^2(1-\varepsilon)$ とすれば、

$$\int_0^{\chi_{\varepsilon}'^2} f_{2t}(x) dx = \varepsilon \text{ であるから、 } k_2(m) > t \Leftrightarrow 2nm \geq \chi_{\varepsilon}'^2 \Leftrightarrow m \geq \frac{\chi_{\varepsilon}'^2}{2n}$$

$$\text{よって、 } k_1(m) < t < k_2(m) \Leftrightarrow \frac{\chi_{\varepsilon}'^2}{2n} \leq m \leq \frac{\chi_{\varepsilon}^2}{2n}$$

$$\text{以上より求める信頼区間は、 } \left(\frac{\chi_{2t}^2 \left(1 - \frac{1-\alpha}{2}\right)}{2n}, \frac{\chi_{2(t+1)}^2 \left(\frac{1-\alpha}{2}\right)}{2n} \right)$$